# 校友時報

昭和48年3月1日
編集人兼発行所
秋田県能代市追分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

## そのかみはるか域開く　平和の相樽子山　奮へ松陵我が健児

## 第二十五期生、卒業

かたく皮につつまれたふきのとうも、皮を破り、緑色の姿を見せる今日この頃である。その春の息吹きを感じさせる三月一日に本校第二十五期生の卒業式が挙行される。

大学入試などのため、卒業予定者三百十七名のうち出席者が百九十二名、例年のこととはいえ、淋しい卒業式である。

高校時代という人生の一ページは、どうだったろうか。それぞれの胸に去来するものは、とりどりであろうが、修学旅行……文化祭……十里強歩……その他という、三年間の学校行事の中に、多くの思い出が自分自身にきざみこまれているだろう。この三年間に友を持ち、いろいろなことについて盛んにディスカッションをかわし、それによって、新しい考える目を開き、それで、また新しいことにぶつかっていく、といった繰り返しだったと思う。しかし、今となっては、それも、思い出となっている。

人生は長いようで、短いといわれるが、それは、幾多の壁にぶつかって生きぬいた人の言うことであって、これから、社会というジャングルに立ち向かう卒業生にとっては、まるで、競争相手のいないレースに出て、勝ったと喜んでいるひとりよがりの門出に立っている姿にすぎない。人生という道は、たくさんのわかれ道があり、門がある。いつも、その門を開けて、親切に招いてくれるような所はない。幾多の厚い壁をうち破ってこそ通れる道なのである。多くの障害を乗り越えて、前進する人間になってほしい。

なお、遅刻者の多いこの現状において、無遅刻無欠課を守った、皆勤者は、次のとおりである。

皆勤賞受賞者（十二名）
三C　菊池忠夫、門間啓一
三D　金谷寿雄
三F　大原　毅、今野秀和
　　斎藤孝一、佐藤重明
　　佐藤昌宏、鈴木貞司
三G　後藤鉄雄、佐藤邦明
　　松山正光

### 卒業式々順

一、修礼
一、開式の辞
一、「君が代」
一、卒業証書授与
一、賞状授与
一、式辞
一、祝辞
一、送辞
一、答辞
一、唱歌「螢の光」
一、校歌
一、閉式の辞
一、修礼

## 部説

## この一年を回顧して　—新聞のあり方と将来—

現在、新聞部は変革の必要に迫られている。マンネリ化の打破、製作技術を向上させるなど、解決していかなければならぬ多くの問題がある。

一年の終わりに当たり、この一年間の反省とこれからのこと、そして、変革の必要性と多くの問題点について述べてみる。

反省についてみると、第一に上げられることとして、紙面のマンネリ化が目立ったことである。これを防ぐため、それぞれの号でそれなりの努力はしてきたつもりである。例えば、132号では、新しい企画として、「旅」を扱ってみた。また、割付けでも、131号や135号で多少の変化を加えてみた。しかし、これらのことは本当の意味でのマンネリ化防止にはなりえなかったといえる。第二に、部員のことがある。今年は入部者が予想以上に多かった。成員の交替はあったものの、前年度末には部員減少のため、四苦八苦していたことを考えると、喜ばしい気持ちもある。

しかしながら、新入部員全員が未経験者であったことには苦労があった。そのため、部員の教育という面で新しい問題に直面することになった。特に、初めての人に対しては、取材の仕方や問題の取り上げ方と、それを記事にするまでの点においての指導法に、難があった。

その他の反省としては、企画記事の取り扱いがある。取り上げ方によってはすばらしい記事が出来上がる可能性のあるものを〆切に追われる形となり、十分に検討しきれず、作り上げることがあったということは、今になっても惜しいと思うことがある。このことから、企画記事は、スポーツ記事などのようなものとは性格がまったく違い、長い準備期間というものが必要であるといえる。

反省の最後に、製作技術の未熟さを上げる。特に、割付けや凸版の使い方、見出しの付け方を研究しなければならない。

来年度からのことについて…。

これまでの反省を生かした形として、仕事の内容やスケジュールなど、しっかりした計画を持つ必要がある。この計画案中には単なる日程表などのようなものでなく、実務的であらゆる点において活用できるものとしての要素を含めるつもりである。

新聞部では過去幾たびか計画的に行なおうとしてきたことがあったが、それぞれ、計画だけで終ったり、ようやく実践に行きついても長く続いたことがなく、すぐ計画倒れになったこともある。しかし、これからは、今までの失敗を生かし、特に、事を急ぎ過ぎないよう注意して、長い目で計画を練るつもりである。

最初、変革の必要があると書いたが、その真意は、新聞と一般生徒のつながり合いという点に焦点がある。現在、多くの生徒は、三無・四無主義という形で生徒の心が新聞から遠ざかっていきつつあるのだから、一般生徒に学校新聞のよさというものを知ってもらうことが大切なのではなかろうか。そのために新聞を作っていかなければならないのであると思う。これが最大の課題であり、新聞部自体の体質も変えていかねばならないだろう。そこから、清新な学校新聞が作りだされるのだと思う。

## 依然として狭き門

今年も受験、就職とあわただしい時期となった。本校の今年度の進学志望、就職状況をみると、進学ではどちらかといえば、国理、国文型というのが、例年に比べかなり減っている。つまり、その減少分が私立にまわっているということである。この国立型を敬遠するという傾向は、全国的なものだが、一例をあげると、今年の旺文社模試で型別の上位者が私文型に多く名を列ね、国立型には少数よりランクされていないという点にこの傾向がはっきり出ているといえる。

第一志望の状況をみると、国、公立は七十三名、私立は百七十七名である。進学希望者の総数は三百十七名である。この数字を三年当初の志望数と比べると、総数では三名減り、国立志望の約半分の六十四名が私立に移っている。進学担当の先生の話では、移るなら早いうちに移った方が無駄が少なくてよいとのことだった。学校別にみると東北大が十八名と昨年より七名ふえ、北大は一人もなく、新潟大は四人で、五人減った。

現在の合格状況は、まだ、ほとんど推薦入学である。今年は上智の外国語、慶応の工学、和歌山県立医大といった難関の大学からも推薦の指定を受け、合格しているのが目立っている。また、最近では、推薦といってもただ、書類だけの所もあれば、面接や小テストを行なう所もある。

全般的にみると、受験者と、大学の受け入れ数の比率では、十人に八人は入れるといった情勢になってきているが、希望の大学への入学となると、依然として激烈な競争であることは変わらない。

就職状況をみると、すでに、全員が決まっている。人数は昨年に比べ十三人ほど減って、四十名である。また、今年度公務員試験に合格したのは二人で例年より激減した。

## 過ぎ来し方

和田花洛

一昨日、私のところに、旧制小樽中学校時代の教え子から、恩師（私と同職だった先生方）を囲んでの、同期会の写真が届いた。

前の方に坐っている老教師は大いに変形はしているが、正しく一緒に学級を担任した仲間のその後の姿である。そして、その後には、昭和十二年に担任したクラスの、これまた大いに変身した姿がある。三人くらいまでは、幼な顔がのこって居て判るが、そのほかは、どうしても思い出せない。たしか私のクラスには、大学教授が二名、医師も五名居る筈だが、どれが誰れやら判らぬながらも、とも角嬉しかった。

こうした写真をみていると、しみじみ教育界を、これまで歩んできたこれまでの年輪みたいなものを覚えると同時に、教員でなくては味わえぬ、ほのぼのとした喜びみたいなものを感ずる。

ともあれ、その間に戦場への応召によって、担任の生徒を泣かせてしまったこともあったが、それもこれも夢の又夢である。

三十数年の教員生活の中で、自分は何をして来たであろうかと回顧してみても、これという具体的な、有形のもののないことを残念に思うと同時に、果して生徒のために良き教師であったかどうか、甚だ心もとないのであるが、よく街頭なんかで、教え子たちから声をかけられるが、こうした場面に、幾度となくめぐり会えるだけでも、倖せと思わねばなるまい。

北海道を振り出しに、樺太、京都、秋田と、校種も師範学校と商船学校を除いては、全部経験したことになる。まことに変化に富んだ教員生活であった。

いままさに、県都大森山々麓に小庵を得て、孫を引っさげての散策を夢見、近くの県警道場に竹刀を交える日の近きを、指折り数う。

われ以て瞑すべきか。

二月二十日　記す

## 祝辞

春の息吹きを大地に感ずるきょう、学窓を巣立たれる卒業生のみなさんに心から祝意を表します。

みなさんは多感な青春時代を高校で送られ、みずからの目で物事を見、社会の動きを膚に感じながら、高校生としての知識や技能を身につけられたことと思います。今後みなさんは、これまでの体験を生かし、自己の理想に向って進まれることになりますが、常に自己を反省し、創造的な考えで物事を判断し、みずからの責任において行動すべきものと考えます。

また「人間は永遠に未完成な存在である」とも言われておりますが、このことばを忘れずに絶えず自己の向上につとめ、生涯にわたって学び続ける謙虚で、しかも意欲的な態度がたいせつであると思います。

みなさんは、これから長い人生をふみだすわけでありますが、それは決してへいたんな道ばかりではないと思います。いかなる困難に出あっても、常に自己に問い、他人とも協調して生きていく方法を発見するようつとめなければなりません。その間、一時的な成功や失敗によって、一喜一憂することなく、みずからえらんだ目標に向かって着実なあゆみをしていくべきであります。

みなさんは、高校生活を終えることになりますが、そのことが実は新たな人生への出発点であることに思いをいたし、自己を深め若さを失わず、さらに研さんをつまれ、新しい時代の担い手として、おおいに活躍されるよう心から期待するものであります。

本日の卒業式にあたり、みなさんのご健康と幸多い人生であることをお祈りし、お祝いのことばといたします。

昭和四十八年三月一日
秋田県教育委員会

## JRC便り

JRCの目標である三本の柱は博愛・親善・奉仕ですが、私はこの中に含まれるものとして、特に「ニード」の発見を取り上げたいと思います。ニードを感じた時はすぐ取り組むこと、例えば勉強会が必要だと思った時はすぐ始めること。親善の域を広げ互いに向上をはかりたい、その為には他県との交歓会も必要だと考えた場合はすぐに計画をたて、行動に移すこと。重症心身障害児の一日保育のお手伝いをしたいと思ったら、積極的な活動を一生懸命やること。勿論単なる自己満足などに終わらず、真に相手のお役に立っているかどうかを第一に考えること。そして至らない私達の手を待っていて下さるところには勇気を持って出かけること。地域と結びつくことがまた大切です。歳末に能代山本地区JRC協議会全員で街頭募金を行なったところ九万二千五百五拾六円になり、早速能代市に届けましたが、速やかに協力したおかげだと思います。お小遣を箱に入れて下さった校内の皆様にもこの紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

次に郡市青年社会事業ボランティア講習会の開催があり、本校生徒の参加数は六名も要請されております。費用は全部山本郡社会福祉の方から出ます。JRC部員でなくても一向差し支えないのですから、全校の皆さん、どうか参加を申し込んで下さい。ニードに応えましょう！

（JRC顧問）

## 論点

▼豆腐の値上がりが問題となっているこのごろである。そこで少し日本の将来について考えてみたい。豆腐の値上がりと、日本を関係づけたのはほかでもない、資源というものを考えたからである。

▼外からの情報によると、値上がりはまず、大豆生産国の天候不順そして、各国のアメリカからの大豆輸入殺到であるとのことだ。我が国の大豆輸入量は、全体の約九十五％。また二十世紀のエネルギー石油の輸入量は約九十八％。この似かよった数字。これはいったい何を示しているだろうか?。とりもなおさず日本の資源のなさを示していると思うのだ。

▼日本は経済成長の中で工業国に変身して来た。各国から原料を輸入し加工品として輸出する。しかし、このままの状態でこの先、日本は食っていけるだろうか。後進国の工業化が我が国に追いついたら、日本は何によって食っていくのだろうか?。大豆輸入でわかるように、我が国の米以外の農業生産量は、微々たるものである。いったい何を輸出してエネルギーを輸入できるのだろうか。と、こう考えて行くとせっぱつまってしまうのだが、こんな時代が来ないとも限らない。人口はどんどん増えて来ているのだ。我が国が、孤立して生きていけるはずがない。

▼日露戦争の起こった原因は、いったいどこにあっただろうか。それは満洲を支配しようとしたロシアと日本との対立からであろう。満洲の資源の豊かさ（鉄鉱石・石炭）は言うまでもない。しかし、ポーツマス条約により、日本は満洲どころか、賠償金さえ手に入れることができなかったのである。いったいそのために、何万人の若い力が失なわれたことだろう。

▲私達は真剣に考えなくてはいけないと思うのだ。資源のないことを認めた上で、日本が世界の中で何を糧として、生きていくか。そして、これは私達若い世代の最大の課題でもある。